

映画で読み解く現代社会

—「ミラクルバナナ」に見るソーシャルビジネスの種—

Movies Tell Us Society of Our Time —An idea for Social Business From “Miracle Banana”

三輪 昭子 Shoko MIWA

概要

映画は現代社会を写す鏡である。私たち人間が作品づくりをする際、私たちが持っている世界観、社会観が自然と作品づくりに反映されて、共感を得るものになっているからだ。つまり、私たちが生きている社会と全く関連のない内容を持った作品はないと断言できる。たとえ、SF映画でも、同様である。それだけでなく他にもホラー、アクションと映画にはさまざまなジャンルがあるが、それらが映し出す物語は現実世界を比喩的に表したものになっているはずだ。

劇映画『ミラクルバナナ』は実話に基づく作品である。この作品を監督した錦織良成氏は、何気なく書店で手にした一冊の絵本がバナナの紙でできていることに驚き、それが制作のきっかけとなったという。学習研究社から発行された『ミラクルバナナ』という絵本には、「バナナの紙ができるまで」という見出しのページがあり、そこにはバナナ・ペーパーの作り方が説明されていた。

そのバナナ・ペーパーの作り方の説明の中には、バナナの生産地でしか考えられないプロジェクト¹があり、その生産地が発展途上国であることが多いところに着目すると、昨今さまざまなところで話題にされている「ソーシャルビジネス」の種になるのではないかと思われる。映画の中で展開されるプロジェクトを参考に、そのビジネスにつながる潜在力ある要素が何であるかを、この作品を通じて考えたい。

キーワード

バナナ・ペーパー	Banana Paper
発展途上国	Developing Countries
グローバリゼーション	Globalization
ソーシャルビジネス	Social Business

目次

- 1 はじめに
- 2 『ミラクルバナナ』が投げかけるもの
- 3 バナナの潜在可能性
- 4 ソーシャルビジネス

1 はじめに

日本人にとってバナナは日常的な、特別感のない食べ物である。しかしながら、そのバナナが意外なところで、意外な存在感をもって私の前に登場したことがある。

10数年前にコスタリカに旅行し、バナナと私の不思議な巡り合わせに遭遇した。首都サン・ホセの中心部近くに日系スーパーマーケットを見つけた。ヤオハンであった。

海外旅行に出ると、その地域での文房具を購入す

ることにしている。文房具そのものには、そんなに大きな特徴はないように思うが、場所によって時々使用される素材やデザインに「その地域らしさ」が発見できて、楽しい。だから、その違いを楽しむためのお土産にもなる。自分自身も使ってみたくなる。

コスタリカのヤオハンの文房具コーナーで見つけたのは、バナナ・ペーパーのノートであった。当時、バナナ・ペーパーというものがあるのを初めて知り、その珍しさで、携帯しやすいサイズの手帳を購入することにした。

その後、『ミラクルバナナ』というタイトルの映画が愛知県、岐阜県を舞台として制作され、名古屋で先行上映されているという噂を聞いた。タイトルに興味をもって上映館で全国に先駆けて鑑賞した。2005年11月（全国規模での公開は、2006年）のことである。

2 『ミラクルバナナ』が投げかけるもの

タヒチ（TAHITI）とハイチ（HAITI）を間違えた。行ってみたらとんでもない国だった。だけど、何とかなるもんです。あきらめないことって、気持ちいい！²

そんなリード文で始まる本作品の物語の紹介文には、大使館派遣員としてハイチ共和国に赴任した主人公、幸子の奮闘が簡潔に描かれている。冷静に考えれば、タヒチとハイチを間違えることなど、あり得ないと思えるが、その国名の綴りを見れば合点がいく。TAHITIとHAITIは、一見して文字の形から誤解をしてしまうと共感する。それだけであると、注意深さに欠け、勢いだけで実行してしまうような印象を与える人物設定になるが、幸子は明るい性格と粘り強く努力をする性分で、政情不安定で貧困にあえぐハイチ国民の姿を目の当たりにし、奮闘するのである。

タイトルの「ミラクルバナナ」は、この作品の企画を立て、脚本を書き、映画を完成させた監督が実際に手に取った絵本『ミラクルバナナ』に触発された結果であった。その絵本はバナナ・ペーパーで造られていて、巻末に「バナナ・ペーパー・プロジェクト」が紹介されていた。錦織監督は、そこに着想を得て、実話を生かした物語構成をしたのである。

2.1 ハイチ共和国³

カリブ海のイスパニョーラ島の西側3分の1に位置し、面積が日本の四国の約1.5倍で、国土の4分

の3が山地からなる小国、それがハイチ共和国である。映画『ミラクルバナナ』の舞台は、このハイチと日本の愛知県と岐阜県に設定されている。愛知県には名古屋市という政令指定都市があり、同県の県庁所在地でもある。三大都市圏の一つである中京圏の中核都市でもある。岐阜県には美濃市という和紙の産地として有名な地域があり、美濃和紙は伝統的工芸品として通商産業省⁴に認定されている。そこには、発展途上国で貧困にあえぐ国と、戦後60年を経た先進国の日本（名古屋市）とのコントラストが、より一層ハイチという国の政情不安と経済的疲弊が明確にさせられる。実際、ハイチ共和国は西半球の最貧国とも言われる。他方で、先進国の日本には伝統的な巧みの技として、和紙作りという技法が古くからあり、これが自動車や電化製品というテクノロジーの国という日本のイメージとのギャップを生じさせる。その和紙の技法を応用してバナナ・ペーパーを作るというところに、面白みがある。

ハイチ共和国の話に戻ろう。この国の公用語はフランス語で、宗教はカトリックが大多数を占める。コロンブスが1492年、この島に上陸したときから世界史に登場することになった。母国のスペインによく似た風光であることから、イスパニョーラ島と名づけられたが、その後17世紀にフランスに割譲された。19世紀初頭、フランス革命に触発された奴隷たちが「自由」と「平等」を求めて蜂起、フランスから独立を勝ち取った。国名となった「ハイチ」はタイノ語の「山々の高くそびえる地」を意味する。

スペイン領だった頃より、砂糖、カカオ、コーヒー、インディゴの大規模栽培が行われていた。現在ハイチ人と呼ばれる人々の大多数は当時のプランテーション経営を支えるために西・中央アフリカから連れて来られた黒人奴隷の子孫である。その結果、黒人たちが多い国であり、「世界初の黒人共和国」とも言われた。

独立後のハイチの歴史は波乱に満ちていた。度重なるクーデターによる政情不安に、その影響を受けて基幹産業は発展せず、生活基盤も整わず、国民は貧困にあえいでいた。学校に行けない子どもは多い。

そんなハイチで、2010年1月12日（現地時間）マグニチュード7.0の大地震が起きた。200年ぶりの大地震のようだった。地震直後から現地と日本の連絡は途絶え、多くの建物がつぶれ、20万人以上の人が亡くなり、300万ほどの人が被災したようである⁵。

2.2 ハイチと日本

『ミラクルバナナ』の監督は、絵本の中にあった「バナナ・ペーパー」の作り方の説明を参考に、このプロジェクトに関わった人々に取材を重ねて脚本の核をつくり、その後ハイチ共和国へと訪ね、取材を重ねた。

ハイチの在留日本人の数は極めて少ない。2011年10月現在で41名だとする記録⁶がある。錦織監督が情報収集を試みていた時期、日本人は大使館スタッフとその家族、あとはキリスト教のシスターたちで、全員を合わせても20名足らずであった⁷。

取材を重ねた時期が2001年9月11日の米国同時多発テロの勃発で、海外ロケの中断を余儀なくさせられるだけでなく、撮影が中止寸前にまで迫りやられたという。また、国際情勢の急激な悪化が影響してハイチの治安もさらに悪化するという事態にまで追い込まれた。

そんな中で、このバナナ・ペーパーに関わる企画に賛同してくれた外務省に協力してもらい、何とかハイチを訪れることができたのである。

そのハイチ訪問では、危険で、経済的に厳しいという悲惨な状況であってもハイチの人々は明るく前向きに生きている。それに対し、経済的にも物質的にも恵まれていると思っていた日本のことを思い、日本の現状として、1万を超えるヒトが交通事故で命を落とし、その3倍もの人が自ら命を絶っていることをハイチの人にしたら、「お前たち日本人って、かわいそうだな」と同情されたこと⁸を思い出し、ハイチの人々の明るさに感動し、教えられたという。それが、「幸せ」とは何か、「豊かさ」とは何か、ということだった⁹。

そこには、ハイチの現状を見て、日本の、日本人の現実を再考し、その本質を考えようとした錦織監督の思考のプロセスがある。

他方で、ハイチで医療支援をしてきた須藤昭子氏は自らの著書で、地震後のハイチと日本について語り、メッセージを残した。そのメッセージには、日本の多くの若い人から「希望がありません」という言葉をよく聞かされたので、ハイチの人たちのことを思い出した、というものである。

彼らはもともと貧困であるが上に、今回の地震でもっと悪くなったから、さらに希望が無くなるだろうと推測できたが、ハイチの人たちは希望を失っていない。希望がないからこそ希望を持つしかないと感じるのだというのだった。大地震があつて、多く

が身近な人の命や自分の住まいを失ったのにもかかわらずハイチの人たちが明るかった。ずっと困難の中に生きてきたから、その苦しさに耐えていく力を持っているのだと思われた、と¹⁰。

2.3 『ミラクルバナナ』で語られること

この作品は、大使館の派遣員としてハイチ共和国に赴任した「幸子」という24歳の女性の奮闘記を描いたものである。彼女を軸として、彼女が現地に出会っていく人々やモノによって彼女自身の成長と頭で考える幸せと、心が望む幸せの違いを表現しているようである。そこには、錦織監督がハイチで感じたこと、つまり過酷な貧困状態にあってもなお、生命の輝きを失わず朗らかに生きる民衆を見つめながら、豊かさとは、人間の強さとは、と自問を重ねた末に、「どうしても伝えたいという思いが人を動かす」という確信を描いたのである。それには貧しさは関係しないのである。



映画基本情報

タイトル ; 『ミラクルバナナ』

脚本・監督 ; 錦織良成

制作 ; 日本、2005年

その幸子が大使館員の仕事として小学校の調査に出かけた帰りに車が故障したこと、ジャックという少年に出会う。ハイチには学校に通えない子どもが多くいるが、ジャックは貧しいながらも学校に行けるだけ恵まれている。しかし、学校に行けたとしても紙が貴重のためノートすら買ってもらえない。現地職員のフィリップに案内されて、ハイチのさまざまな現状を、幸子は驚きをもって知っていくことになるのである。

そんなある日、たまたま日本から送られてきたビデオを見ていた幸子は、バナナの木から紙ができることを知る。ハイチではバナナは主食として栽培されている。しかし、こんな貧しい国でも、実を収穫した後のバナナの木は捨てられている。それを原料に紙を作ることができれば何かが変わるかもしれない。そう直感して幸子は動き始め、やがて、バナナの紙を作るプロジェクトを立ち上げる。

しかし、ハイチの国内情勢の悪化から起きた暴動

に巻き込まれ、プロジェクトは一時中断。そんな中で、幸子は日本に帰国し、紙の研究をしている大学の教授や大学院生に相談し、アドバイスをもらいながら、やっと和紙職人を伴ってハイチに渡ることができた。

どうすればバナナの紙が、ハイチで作らだせるのだろうか。現地の道具で、日本の技能を生かすことができるのだろうか。そして、工夫に工夫を重ねる。

物語の最後はハッピーエンドである。実際に小学校でバナナ・ペーパー作りが成功し、その喜びに多くの人が集まってダンスを踊るのだ。

2.4 バナナ・プロジェクト

特定非営利活動法人バナナ・プロジェクト (Non-Profit Organization Association of International Cooperation for Banana Paper Project) は、2001年11月設立、2002年3月法務局に登録された市民団体で、会員数100名（2004年4月現在）。会長は、名古屋市立大学芸術工学部大学院教授の森島紘史氏である。会員は、バナナ紙・布の製造技術を、途上国に広めることを目的にしている¹¹。そのため、研修会を行うことで技術指導力を高めている。さらに、ベトナム、沖縄、竹富島などへの技術研修旅行を実施、地域技術との交流を計っている。

バナナ・プロジェクトは、99年中米ハイチ共和国で始動した¹²。ハイチは長引く政権闘争、人権侵害、暗殺の横行から、米国による経済制裁が行われ、失業率75%（在日本大使館調べ）、一人当たりGDP 551米ドル（世界銀行01年）で、西半球の最貧国である。山がちであるハイチは、燃料不足から生じる森林伐採、薪炭化が進み、いまでは国土の95%が砂漠化した。公立小学校の月謝700円が払えず就学できない児童が多く、成人識字率は45%（国連開発計画調べ）、ストリートチルドレンが10万人を超えている。ハイチの特産であるバナナは年間約58万トン生産され、人々の主食となっている。農業人口は全人口の約3分の2、国内総生産に占める割合は41%、バナナ農園は地方経済の重要な役割を担っているが、現金収入が乏しいため貧困地域ともなっている。

日本のODA（政府開発援助）により、国立ハイチ大学で1999年より数回にわたりバナナ・ペーパー製造技術普及セミナーが実施、2001年、2002年には製紙所2棟が建設された。その後、現地サイド

の努力もあり、農村部の製紙所では、女性を中心に50人が働き、1家族平均8人の村では400人の生計を支えている。この成果をみたハイチ政府も、今後のプロジェクトの進展に大きな関心を寄せている。隣国ジャマイカでも、農園で製造したバナナ・ペーパーを首都ジャマイカで製品化する「地方と都市との連携した経済活性、収入向上プログラム」を展開している。

3 バナナの潜在可能性

バナナの原産地は東南アジアのマレー半島あたりと言われる。バナナの生産地は熱帯、亜熱帯地域に分布し、バナナベルト地帯と呼ばれる、赤道をはさんで南緯30°から北緯30°の間で、高温多湿の地域が多い熱帯から亜熱帯地域で栽培されている¹³。現在バナナの生産量はインドが圧倒的に多く、以下中国、フィリピン、エクアドル、ブラジルとなっている¹⁴。

また、「バナナの木」という表現をしても問題ないが、正確にはバナナは木ではなく、巨大な草で、バショウ科に属する多年草なのである。

バナナは実を収穫する際に、巨大な茎と葉は切り倒され、その場に捨てられる。バナナは一度実がなれば枯れるので茎を切って栄養分を新芽にまわすことで、バナナの生命力は約20年間続くと言われる。多年草であるから、バナナ農業では、実よりも茎や葉の農業廃棄物が収穫の果実の5～10倍派生するのである。つまり、収穫物より廃棄物の方が格段に多く発生する農業ということができるのである。

3.1 廃棄物バナナの茎

既述のように、バナナ・ペーパーの原料は、これまで廃棄対象であったバナナの茎である。その廃棄量は、バナナ生産量を1億トンなら10億トンと推計できる。茎や葉にはバナナと果実の房を支えるための強靱な繊維が約3%とあり、それを抽出してパルプにすれば紙の原料となる。さらに、その繊維を精練すれば糸になり糸は織ることで布になるのだ¹⁵。

バナナは、その実を食糧に、捨てられる茎は紙に、短期間で生育する巨大な葉は二酸化炭素を多く吸収することができる。森林破壊、地球温暖化を始め多くの地球環境問題が山積する現代、有用価値の高い農業植物と位置付けることができる。

3.2 学習素材「一本のバナナから」¹⁶

バナナはすでに、ひとつの学習素材として活用されていた。その端緒は『バナナと日本人』¹⁷という書にある。その冒頭に「今日、バナナは、四季を通じてどんな田舎でも手に入る果物になった。値段も安定している上に、果物の中では最も安い部類に入る。種がなく、皮も自分でむけるから、子どもたちのおやつには格好の食品である。」¹⁸という記述がある。自分自身の子ども時代を思い出せば、確かにバナナは身近な果物である。

バナナの生産地は台湾やフィリピンが想起される。既述の著書にも、1960年代末ぐらいからフィリピン南部のミンダナオ島に日本市場向けの専用農園が開発され、今日のようにバナナが大衆の日常的な食品となっていた。それ以前は、台湾、エクアドルその他の中南米諸国からの輸入によっていた。

『社会科＝一本のバナナから』の著者、大津和子はバナナについているシールからドールとかデルモンテなどの多国籍企業の介在に気づかせる。そして、バナナのプランテーションで働く人々について考え、バナナの生産過程にも切り込む。そこから、例えば一本のバナナから安い値段の秘密を追究する。農薬の怖さを知る。または、南北問題を考える。多国籍企業のあくどさを知る。これらは、一本のバナナという具体的なモノが導入となって、追究意欲をかきたてる課題設定となっている。

この著書の文脈からは、バナナは南北問題の象徴的な存在となる食べ物と言うことができる。実際、アメリカ資本によって大規模にプランテーション化し、その労働者たちは自ら好き好んで食べるのではない食物を栽培しているということになる。

3.3 バナナ・ペーパー環境教育¹⁹

2005年愛知県で、「自然の叡智」をメインテーマとして国際博覧会（通称、愛・地球博）が行われた。メインテーマにはサブテーマとして3つのものがあり、その中に循環型社会というものがあった。バナナ・ペーパーを利用した環境教育は、そのテーマに合致するものと言うことができる。

愛・地球博の会場で会期中、270万人の方々が「熱帯！バナナ村」を訪れ、「バナナの紙すき体験」に2万人が参加するという実績があったほか、地球環境問題の解決と人類・地球の持続的可能性に大きく貢献する地球環境技術に与えられる「愛・地球賞」を受賞した。

文部科学省の大学支援事業のひとつである「平成18年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム」の持続可能な社会につながる環境教育の推進分野へ申請した「バナナ・ペーパーを利用した環境教育」が採択された。

4 ソーシャルビジネス

昨今、ソーシャルビジネスという言葉がよく登場しているように思う。政府レベルでも政策的に経済産業省が積極的に支援している様子が見て取れる。その経済産業省では、ソーシャルビジネスを、次のように定義つける。

すなわち、地域社会においては、環境保護、高齢者・障がい者の介護・福祉から、子育て支援、まちづくり、観光等に至るまで、多種多様な社会課題が顕在化しつつあります。このような地域社会の課題解決に向けて、住民、NPO、企業など、様々な主体が協力しながらビジネスの手法を活用して取り組むのが、ソーシャルビジネス（Social Business、以下SB）／コミュニティビジネス（Community Business 以下、CB）である。

しかしながら、SBにおいては、事業を通じて直接的な社会的課題の解決を目指すビジネスという意味づけか、それともツイッター（Twitter）、フェイスブック（facebook）を代表とする「ソーシャルメディア」を活用したビジネスという位置づけなのか混乱していることも事実である。

4.1 SB認知度

NPO法人ETICは、ソーシャルビジネス・社会起業家というコンセプトに関する認知度調査²⁰を実施した。その調査は、株式会社セレスの協力を得て、セレスの運営するポイントサイト・モッピーの登録会員を母集団とする全国の20代・30代の男女を対象としている。

「ソーシャルビジネス」または「社会起業家」という言葉を知っているかという間に、「聞いたことがある」という回答が20代・30代では6割を超えていることがわかった。また、全体の7%は「内容まで詳しく知っている」と答えている。

さらに、集計ベースで「内容まで詳しく知っている」と「聞いたことがある程度」とした回答者に対し、どういった経路で知ったかという間に、テレビを経由しての認知が43.7%と圧倒的に多く、ニュースサイトの23.7%と続くという回答を得られた。

4.2 バナナ・プロジェクトに見るハイチの可能性

ハイチでは、バナナは主食であり、収穫量は年間およそ 58 万 3000 トンで、砂糖黍に次ぐ主要な生産物となっている。しかし栽培の技術水準が低い。また、国土の 75% に及ぶ山岳地帯は、貧困により燃料を購入できない人々が木々を伐採して燃料に添加したために森林の 97% が消失した。その結果、山岳地帯は砂漠化していて、大雨による土砂崩れなどの大災害が起きている²¹。

こうした環境保全に関わる社会的課題、またそれに伴う貧困問題が生じている。プロジェクト実施により、農村部に新たな雇用創出、貧困からの脱却により経済的自立が可能になるという試算の下、プロジェクトを推進。バナナ・ペーパーによる付加価値のある商品が生産され、農村に新たな収入が入るなど生活が維持できるまでに成長した。

ところが、2003 年 8 月反政府勢力が武装蜂起、国内情勢が急速に悪化、翌年には大統領が国外脱出で無政府状態になり、プロジェクトどころではなくなってしまう。

とはいえ、ハイチを悩ませる社会的課題の、環境問題と貧困問題を同時に解決できるものが、現地の主要生産物であるバナナにあった。それを和紙製造という日本の伝統技法で容易にバナナ・ペーパーにできるという画期的なビジネスの種があったと結論づけることができる。

注

1 森島紘史『バナナ・ペーパー 持続する地球環境への提案』鹿島出版会、2005 年、この著書の冒頭にバナナ・ペーパーのことが簡潔に説明されている。すなわち、バナナ・ペーパーとは、熱帯・亜熱帯地方の途上国で生産されているバナナの生産廃棄物「茎」を原料に作る紙である。

2 ミラクルバナナ制作委員会『ミラクルバナナ』東洋化成株式会社、2005 年、p.4

3 ミラクルバナナ制作委員会『ミラクルバナナ』東洋化成株式会社、2005 年、p.12-17。

4 現経済産業省のこと。

5 須藤昭子『ハイチ 復興への祈り 80 歳の国際支援』岩波ブックレット、2010 年、p53。

6 外務省、各国・地域情報、中南米、ハイチ共和国 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/haiti/data.html>

7 ミラクルバナナ制作委員会『ミラクルバナナ』東

洋化成株式会社、2005 年、p.8

8 このエピソードは作品に生かされている。脚本には、大使館派遣員の幸子が、地元の職員に日本の現実を話すと、その職員は「何でも豊かにある日本なのに」と驚く場面を挿入させているのである。

9 ミラクルバナナ制作委員会『ミラクルバナナ』東洋化成株式会社、2005 年、p.9

10 須藤昭子『ハイチ 復興への祈り 80 歳の国際支援』岩波ブックレット、2010 年、p53-55、最後に「日本の若いみなさんへ」としたメッセージが p 62-63 に収められている。

11 『Banana Green Gold Project』Members 内の「NGO バナナ・プロジェクト」による。

<http://www.bananaproject.com/jp/contact/index.html>

12 森島紘史「学者が斬る（158）バナナ・ペーパーで国を興す」『エコノミスト』毎日新聞社、2004 年、p52 - 55

13 森島紘史『バナナ・ペーパー 持続する地球環境への提案』鹿島出版会、2005 年、p15-17

14 「バナナの生産量の多い国」『外務省世界いろいろランキング

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/haiti/data.html>

15 森島紘史『バナナ・ペーパー 持続する地球環境への提案』鹿島出版会、2005 年、p31-41

16 大津和子著の同名の著書が 1992 年に国土社から発行されている。この著書は高等学校での社会科の実践記録と呼ぶにふさわしい内容で、エスニックな面白さだけでなく、南北問題の背後にあるアジアの人々の厳しい現実を射程において、授業の中で一本のバナナを切り込み口に南北問題に迫っている。

17 鶴見良行著、岩波新書、1982 年。

18 鶴見良行『バナナと日本人』岩波新書、1982 年。

19 『名古屋市立大学の地域貢献（平成 19 年度）』www.nagoya-cu.ac.jp/secure/4231/19koken.pdf（閲覧日 2013 年 12 月 2 日）及び、『バナナ・グリーン・ゴールド・プロジェクト』<http://www.bananaproject.com/jp/index.html> 1 を参考にしてみた。

20 NPO 法人 ETIC 『【調査報告：サマリ】ソーシャルビジネス・社会起業家に関する若者認知度調査 2013』ソーシャル・NPO・ベンチャー求人情報 DRIVE <http://www.etic.or.jp/drive/labo/1032>

21 森島紘史『バナナ・ペーパー 持続する地球環境への提案』鹿島出版会、2005 年、p89

（原稿受理年月日 2013 年 12 月 9 日）